

付論 土師器皿(Bタイプ系)の器形、規格の変化と製作技術について

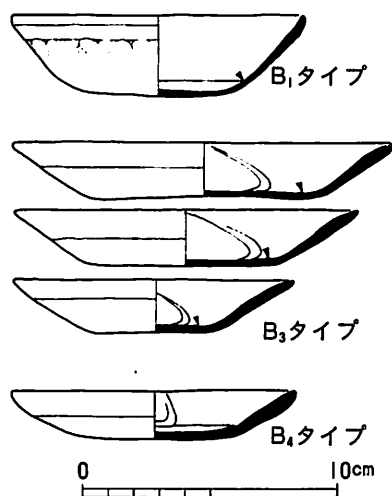
13世紀～18世紀に位置するBタイプ系(白色系)土師器皿の器形及び規格の変化を、製作技術面からとらえてみる。

土師器皿の製作法は単に、「手づくね」とされるだけで、具体的な製作法は明らかではない。また土師器皿は、Aタイプ系(褐色系)、Bタイプ系(白色系)¹⁾に分類され、成形上の違いは大きい。この両タイプを区別しないと製作法の解明は煩雑になってしまう。Aタイプ系、Bタイプ系の分類が明確になり、Bタイプ系一連の編年ができ²⁾、器形の変化を順次追うことにより、製作技術を想定することができるようになった。

1 京都岩倉木野の土師器皿

京都市左京区岩倉木野においては最近まで昔ながらの製作法で土師器皿が作られていた。現在も神社境内に窯一基が現存する(図版第85上)。(昔は各屋敷内に置かれ、家内工業的な生産が行なわれていた。)旧来、木野は土師器皿の生産集団によりできた村である³⁾。

ここで作られていた土師器皿はB₁タイプとEタイプ⁴⁾に分類でき、それぞれ最終型とすることができる。木野の土器生産については、戦前、島田貞彦氏が詳細な観察を行い報告しており⁵⁾、使われる主な成形道具に「うつげ」〔図版第85下、木製の円板(現存するものは、直径13.3cmと20.5cm、厚さ2.0cm)で主に粘土を薄く延ばしながら器形を整えるための道具〕と「ほへ」(麻布、巾17cm、長さ55cmぐらいのものを折りたたんで使う。時に竹を軸にする。口縁・内面の成形・調整に使う)がある。



2 瓦器碗の製作

瓦器碗については近年、川越俊一・井上和人氏が実験をふまえて、内型による成形法を提唱している⁶⁾。瓦器碗は土師器皿とは明確に区別されるが、B₁タイプでは、碗形の器形、外面の調整に共通点を見ることができる。

前記2例の製作法から、B₁タイプを内型成形とした場合、Bタイプ系土師器皿は、内型成形法から始まり、「うつげ」を使う成形法へと変化していったものと想定することができる。この場合「うつげ」は、内型が変化したものととらえられる。(現在「うつげ」は器壁を薄く延ばすことが主で、器形・口径の決定要素にはなっていない。)この変化をB₁→B₄タイプの器

第55図 Bタイプ系土師器皿の器形変化
「へそ皿」・B_{3.4}タイプの最小器は除く

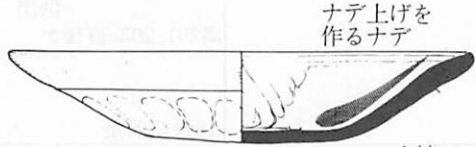
形・規格の変化に照合させ、製作法を想定してみる。

B₁・B₂タイプ

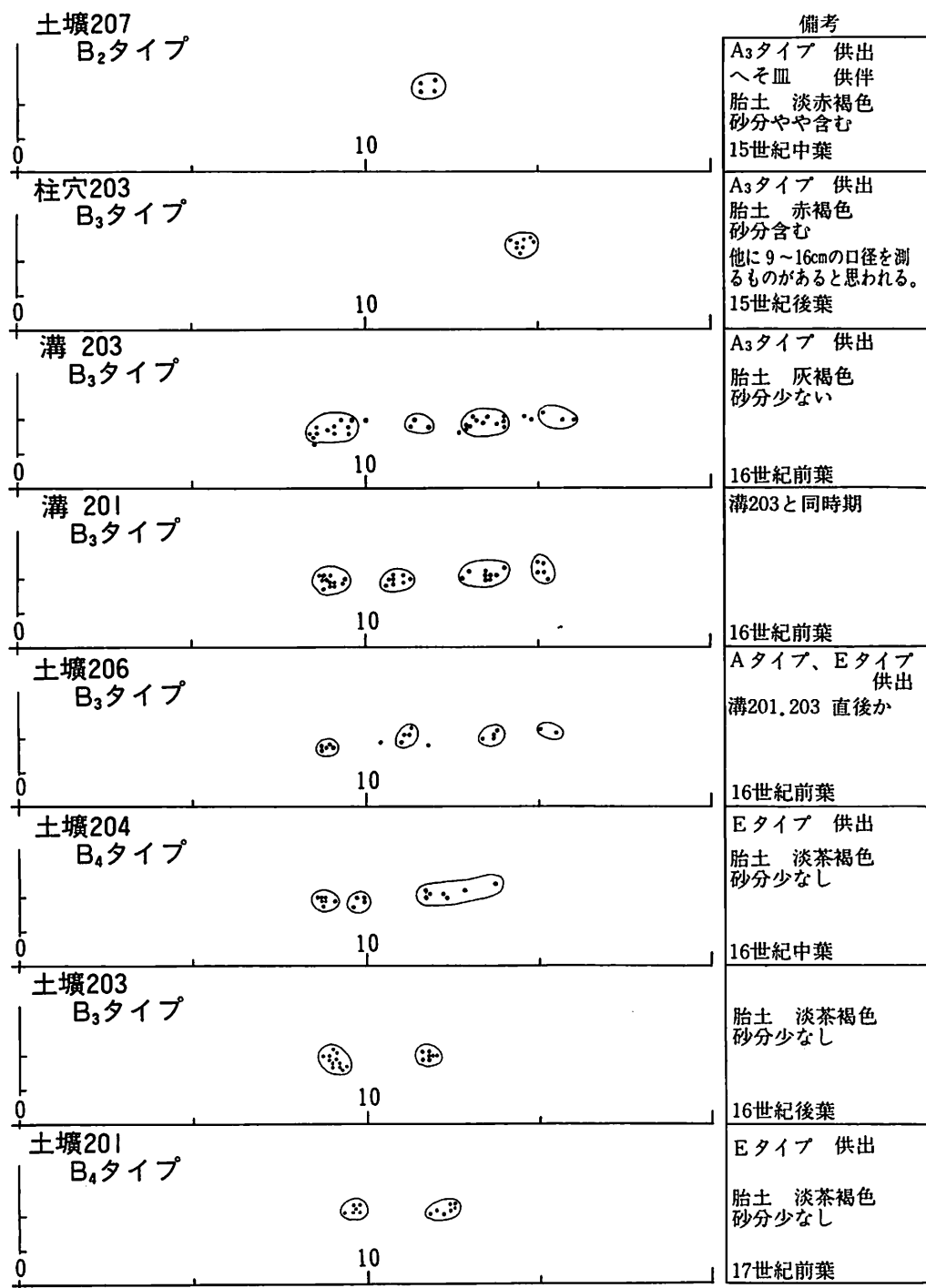
B_{1,2}タイプは、川越俊一・井上和人氏の提唱する、内型による瓦器埴の成形技法に近い方法をとっていたと考えられる。胎土はAタイプ系(褐色系)に較べきわめて精良で、十分な水簸が行なわれていたものと思われる。焼成後の胎土は灰白色を呈しているが、これは鉄分が褐色系に較べ約 $\frac{1}{3}$ しか含まれていないことによる⁷⁾。

ある程度薄く引き延ばした粘土を内型に軽く張り付け、体部中央を連続的に押し、形を整える。口縁を切りそろえ、型からはずした後、内面、口縁部にナデ調整を施す。

内型を使用した場合、器形は型によりほぼ決定してしまう。B₁タイプは、へそ皿を共伴する前では3種類の大きさのものを見るが⁸⁾、以後はほぼ口径11.5cmを測るもののみとなっている。器形もほぼ一定しており、成形も良好である。器厚は薄い。外面底部周辺には細かいヒビが見られる。以上は内型成形の特徴と言える。また問題となるのは内型から粘土をいかに剥がすかである。器面には、砂・灰等の剝離剤を使用した痕は見られない。川越俊一・井上和人氏は、実験の結果より、素焼の型を使用することにより、素焼地の吸湿性を利用し、容易に型から剥がすことができるとしている。しかし土師器皿の場合「うつげ」は内型が変化したものとは仮定しており、「うつげ」が木製である所から、木製の型を考えたい。土離れは、型を常に十分濡し

B₂タイプ  ナデ上げを作るナデ 土壙207	◦ 12cm級のみ。小型器はへそ皿に共通する。 ◦ へそ皿を共伴する。A₃タイプが多量に供出する。 ◦ 器形は深形であり、器壁は厚い。 ◦ ナデ上げ痕は一般に弱く口縁全面を引き上げるものが多いが、底部に近いナデが最も強く、引き上げも強い。 ◦ 外面未調整部は、口縁・底部とも連続的に軽い凹部が見られる。
B₃タイプ  ナデ上げを作るナデ 溝203	◦ 9cm級、11.5cm級、13.5cm級、15.5cm級がある。 ◦ へそ皿、A₃タイプ、Eタイプが少量供出する。 ◦ 器形は浅形であり、器壁は薄い。 ◦ 立ち上り部に独立したナデが施されており、ナデ上げ痕は強く残る。 ◦ 外面未調整部は、口縁・底部とも連続的に軽い凹部が見られる。
B₄タイプ (ほへ)  (ほへ) 土壙101	◦ 12cm級、9cm級、(他に15cm級がある。) ◦ Eタイプが供出する。 ◦ 器形は浅形であり、器壁は厚い、B₃タイプに較べ立ち上り部のほり出しが少なく成形ナデの省略が見られる。 ◦ 外面未調整部は口縁・底部とも連続的に軽い凹部が見られる。

第56図 室町後期の土師器皿



第57図 土師器皿Bタイプ系口径/器高図表〔タテ：器高 ヨコ：口径(cm)〕

ておき、粘土の硬さを適切にし、手早い作業を行うことにより問題はない。型からはずしたばかりはまだ柔かく、この状態で内面・外面のナデ調整を行う。

B₃タイプ

ここで内型成形から「うつげ」成形へ変化したものと思われる。ここでの「うつげ」は内型が使用法の変化から、粘土を薄く延ばし円形を作ることに重点が移って出来たものとする。

粘土を「うつげ」で円形に薄く延ばし、ある程度の器形を作る。さらに口縁を「ほへ」で引き上げる。

B_{1,2}タイプとB₃タイプでは器形・器規の変化は大きい。主なものを述べると、多様な大きさの皿があり、4～5種類の規格があって、浅型の器形、口縁部の作りが各大きさの皿に共通する、である。

B₄タイプ

B₄タイプでは内面立ち上り部に、段又は溝を作る。これは最近まで木野で作られていた土師器皿とほぼ同形である。現存する、「うつげ」には「寛文十庚戌年 九月吉祥日」の記名があり、寛文十年(1670)には現在と同様の道具が使われていたことがわかる。(現存するものは寄進物で未使用品。)

今、木野においてこの皿の製作を見ることができなかったが、島田貞彦氏の観察によると、粘土塊を臂の関節に軽くうちつけ、ほぼ皿形の器形を作る。これを「うつげ」の一端にあてがい薄く大きく延ばす。この時、「うつげ」の一端は時々水に浸して土器の密着を防ぐ。器面を凹ますのは指先の動作による。最後に「ほへ」で軽くおさえ回転し成形する。「大重」⁹⁾は「ほへ」の中に竹を入れて回転するために竹の先端で一線を描く。

となっている。B₄タイプが現われる16世紀後葉からは、基本的な作り方は現在とほぼ同様であったと考えられる。B₄タイプは、内面に溝を作っているのが特徴である。

3 製作法の変化と器形、規格の変化

全体的な器形の変化を追うと

- ① 深物(埴形)〔B_{1,2}タイプ〕→浅形(皿形)〔B_{3,4}タイプ〕
- ② 1種類の規格〔B_{1,2}タイプ〕¹⁰⁾→多くの規格〔B₃タイプ〕→2種類の規格〔B₄タイプ〕
- ③ 薄い器壁〔B_{1,2,3}タイプ〕→やや厚い器壁、加えてやや粗雑になる〔B₄タイプ〕

である。

土師器皿は、単一器種・大量生産が基本である。供給側からは、生産性の向上以外には、器形・規格の変化理由は少ないものと考えられる。同じ時期の褐色系(A₃タイプ)で見ると基本的な作りはほとんど変化しておらず、縮小化・粗雑化が¹⁰⁾、生産性の向上のためと見ることができ。Bタイプ系は、A₃タイプに見られるような著しい粗雑化はほとんど見ることができない。このことは、Aタイプ系は、容易に器形を整えられる有用な道具を持ちえず、Bタイプ系においてはこれを持ちえていたと考えこれが内型または「うつげ」と言うことになる。Bタイプ系

はこの道具の使用法、型態を変化されることにより、品質を保持し、生産性を上げていったものと思われる。内型成形から「うつげ」成形への変化からは、直接生産性の向上を説明することはできないが、作業内容を具体的に解析できれば説明はつくものと思われる。

製作法の変化の副産物的なものとして、浅形への器形変化を上げられる。これは前に述べたように「うつげ」は粘土を延ばし形を整えることが主目的であり、器形を凹ますためには手の動き、さらに「ほへ」が必要であり、深形の器形を作るのが困難であったためと考えられる。逆に内型成形の場合は器形保有のためある程度深形であることが要求される。つまり深形から浅形への器形変化は専ら供給側の内因的な要素によるものと考えられる。

さらに副作物的なものとして、規格の多様化が上げられる。内型成形では、使用する型により、その形をほぼ決定してしまうのに対して、「うつげ」は口径の決定要素をはずれているため任意の大きさのものが作れるようになったためと考えられる。第55図に見られるように、B₃タイプは、各大きさの皿に共通して口縁の引き起こしが直線的で、幅・角度・造形がほぼ同じであり、口径の違いは平らな底面径での違いに現われている。このことは、口縁の引き起こしが独立した工程で行なわれていることを示し、B₃タイプにおける、「ほへ」による整形を想定できる。またB₃タイプでは口径が20cmを超えるものも検出されており、「うつげ」成形の任意性を示している。

B₄タイプでは主たる皿の規格は2種類となるが、これは需要面などの外因的な要因が考えられる。B₄タイプは16世紀後葉からに位置づけられるが、この時期ごろから、国産陶器、輸入磁器の大量な検出が見られるようになってくる。土師器皿の検出量自体は18世紀前葉まで非常に多いのであるが、その使用法および使用範囲¹²⁾は明らかに変化したものと思われ、一般的な使用ではいわゆる粗末なものとして扱われるようになったのであろう。

製作法では、口縁引き上げの簡略化がはかられている。「ほへ」の中に竹を入れ軸とし先端で溝を掘ることにより、口縁の引き起こしを容易にしている。この技法を用いた場合、ある程度の器厚の増加はまぬがれないし、外面では口縁の立ち上りはゆるやかなカーブを描くことになる。

主たる規格は2種類であるが、現在残る木野の土師器皿や、文献等を見ると、かなり多くの種類の皿が作られており、「うつげ」成形の特長を残している。

再び、Aタイプ系との比較にもどってみると、この時期A₃タイプは一途に粗雑化、縮小化がはかられているのであるが、同時に大・小2種のみの規格は連綿と守り、16世紀に消滅するまで続いているのに対して、Bタイプ系は3種類の規格から始まり、碗・へそ皿、4種以上の規格、2種の規格、と常にセット関係・規格が変化してきている。Bタイプ系は土師器皿の歴史から見ると新参物といえ、A₂あるいはA₃タイプなど褐色系からの派生としてはとらえにくい¹³⁾。Bタイプ系をAタイプ系と同じ土師器皿、あるいは「かわらけ」の範疇に入れてよいものかまず疑問が生ずるが、遺構からの検出状況や使用法の仮定においては問題はないと思う。Aタイプ

系の土師器皿は伝統的な生産をかたくなに守り続け、Bタイプ系は、そのつど、内因外的な要因によって変化してきたと考えられる。土師器皿については祭祀的な要素を多分に含む所があるが、これを直接、器形・規格に結びつけるのは困難である。

内型成形を設定した場合、瓦器坑生産からの技術導入を考えることができるが、説明できるだけの資料はなく、また多くの疑問も生ずる。内型の料質については、瓦器坑では素焼型を設定しているのであるが、土師器皿では「うつげ」の関係から木製とした。しかし木野において、直径10cm、高さ2cmを測る、平たいまんじょう型の意味不明の素焼品を見ている。これには一部に半円形の切り欠きがある。粘土をこれに回転しながら押しつけ、切り欠き部を利用して外したとも見ることができる。しかしこの口径を示す皿は、「うつげ」で成形しており、用途は不明である。

現在まで土師器皿を焼成したとされる明確な遺構は検出されていない。今後これらの窯跡等が発掘されることにより、製作法等が判明されてゆくことと思われる。(横田洋三)

註

- 1) 横田洋三 「出土土師皿編年試案」(『平安京跡研究調査報告第5輯 平安京左京五条三坊十五町』京都、昭和56年)。
横田洋三 「土師器皿の分類と編年」(『平安京跡研究調査報告第11輯 平安京左京四条三坊十三町』京都、昭和59年)。
- 2) 註1)に同じ。
- 3) この生産集団は、もともと京都嵯峨野深草里(八軒)におり、応仁年間(1394~1427)に幡枝に移住し、さらに元亀年間(1570~1572)に今の地に移ったとされている。
- 4) 註1)に同じ。
- 5) 島田貞彦 「山城幡枝の土器」(『考古学雑誌』第24巻第6号所収、東京、昭和21年)。
- 6) 川越俊一・井上和人 「瓦器坑製作技術の復原」(『考古学雑誌』第67巻第2号所収、東京、昭和56年)。
- 7) 名古屋工業技術試験所の河島達郎氏に依頼し放射化分析で調べた。試料はA₃タイプとB₁タイプ。
- 8) ヘそ皿を供伴する以前のB₁タイプについては、器形・調整法に疑問が残る所があり、今回の型成形の仮定からは一応除外する。
- 9) 口径10cm前後を測る皿。
- 10) ヘそ皿供伴以前を除く。またヘそ皿を共伴する時期においても、小皿の違う口径を示すものがある。さらにB₂タイプではこの傾向は強く、B₃タイプへの過渡期的な様子を示している。またここではヘそ皿は除いて考えている。
- 11) 土師器皿は、一般に、円形を作り整えるために端部に多くの手法を見ることができる。またこの手法の変化が時代変化を追う手がかりにもなる。ここでの工程を省略すると生産性は上がるが、直接粗雑化に繋がる。これは、他のロクロ成形等の土器には見られない土師器皿特有のものと言える。
- 12) 土師器皿は器として考えられる用途すべてに使われていたと考えられる。また浄器として祭祀にも用いられる。奥田直栄 「土器三題」(『世界陶磁全集』月報No.6~8、東京、昭和53年)。
- 13) B₁タイプの最初期形はA₂タイプに似類した器形をとり、そこからの派生ととるむきもある。